

V 考 察

1 出土土器について

(1) はじめに

新平・芦萱遺跡からは総計143,759.2gの古代土器が出土している。新平遺跡土器廃棄場（S X01）出土土器については十和田aテフラとの関係とその遺構の性格から一括性の高いことから、時期的にまとまった様相を呈する。そのため、今後重要な年代決定資料となり得ることからここで再度その特徴をまとめておきたい。

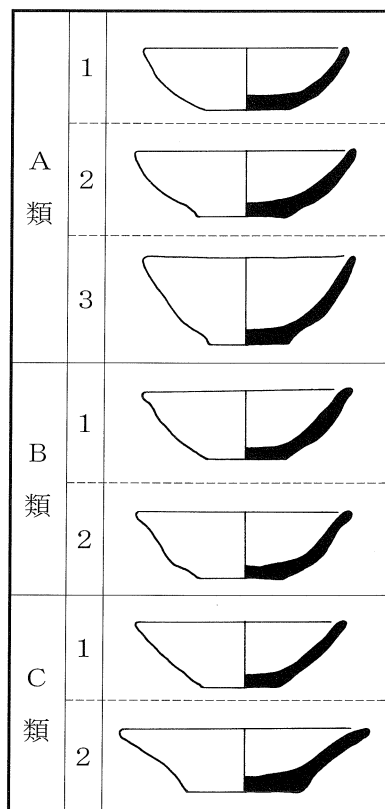
(2) 分 類

ここでは、出土した古代の土器のうち量が多い杯（非内黒）と甕を中心に分類を行う。そしてそれらを周辺の遺跡と比較後、先行の研究成果に対比させていきたい。

杯の分類¹

口縁部および体部の形態を指標にして大きく3大別する。さらにこれらを底部形態、器高などを基準に細分すると以下のように7種に分類する。

- A類 体部、口縁部ともに内彎するものを一括している。底部の形態的特徴や器高によって3つに細分される。1類は底部（側縁）が窪まないもの、2類は底部（側縁）が窪むもの、3類は2類と同様の形態であるが器高が高いもの、に3分される。
- B類 体部は内彎しながら立ち上がるが、口縁部が外反するもの。底部の形態的特徴によって2分される。1類は底部（側縁）が窪まないもの、2類は底部（側縁）が窪むものになる。
- C類 体部が直線的に立ち上がるが、大きく外反するものを一括している（体部が内彎しないもの）。体部の形態で細分し



第54図 杯の分類

ている。1類は体部が直線的に立ち上がるもの。2類は体部が外反するものを分けている。

これまでの研究においてはこの時期の杯類には法量分化が確認されることから(伊藤1996)、これらをさらに小型から大型までの4つに分けて、小さい方からⅠ……Ⅳとした。同時期における相対的な差をもって分ける場合もあるが、今回は口径を基準に、Ⅰは口径10～11cm以下、Ⅱは11以上～13cm以下、Ⅲは13～15cm前後、Ⅳが15cm以上と仮に設定しておく。この数値は目安であり新平遺跡を中心に設定したものであるため、広範囲に利用する場合多少数値が変わる可能性がある。

甕の分類

甕は口縁部から底部まで完存するもの、完形に復元できるものが少ないため口縁部のみによる分類を行う。

- A類 口縁部が外反するいわゆる単純口縁の形態をとり、調整にロクロを使用しない。口縁端部がわずかに肥厚するものもある。

B類 口縁部が外反するいわゆる単純口縁の形態を取り、調整にロクロを使用する。

C類 口縁部は外反しながら立ち上がり、端部が上方に引き出されるもの。立ち上がる角度によって細分されるが、ここでは一括している。

D類 口縁部が外反しながら立ち上がり、端部が上下に肥厚するもの。

E類 口縁部が内彎しながら立ち上がり、短部を平らに仕上げるもの。外面に鰐状の粘土紐を添付させる。

F類 口縁部が外方へ大きく広がりながら立ち上がるもの。外面に幅広のナデが加えられるもの。

その他の器形

そのほか土師器には鉢や耳皿が、須恵器には甕類があるが数が少ないためここでは分類を行わない。

(3) 出土土器の特徴について

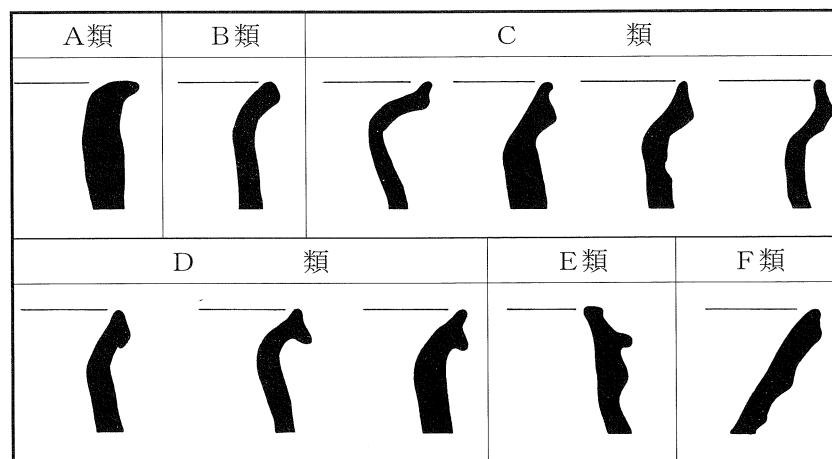
個体数について

まず新平遺跡土器廃棄場（S X01）における組成率をみておこう。器種には土師器杯（皿）、土師器高台杯、土師器甕、須恵器杯、須恵器甕・壺がある。出土した個体数を推定するため1/12計測法（切り上げ法・森本1994など）を用いて計測をおこなっている。口縁部ではとくに杯口縁部が1/12以下のものが多く、計測に誤差が生じかねないおそれがあったため底部計測法によった。また、甕についても安定的な量が確認できたことから底部計測法によっている。

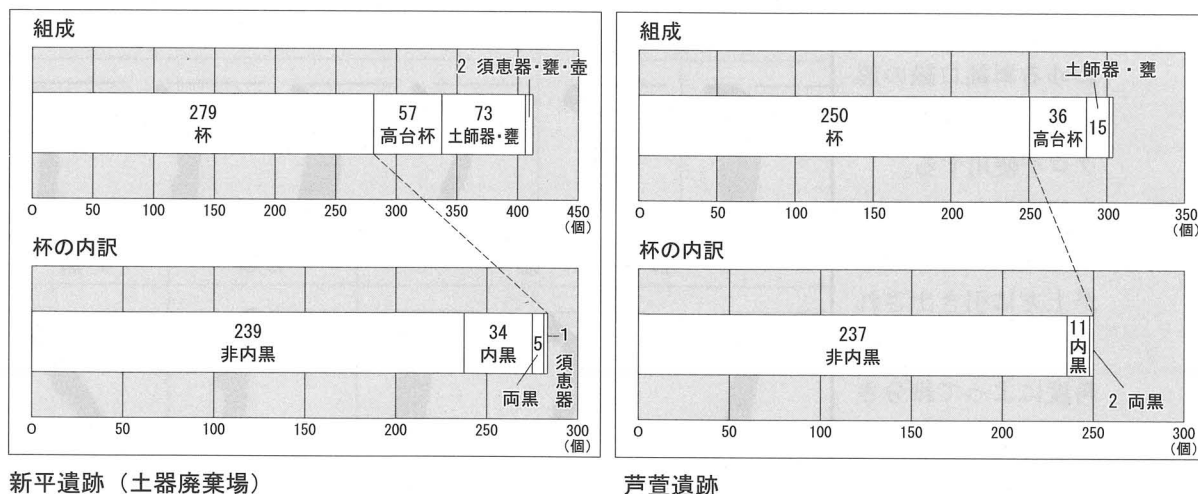
それによると、全個体数は411点となる。この遺構は部分的な範囲を調査したに過ぎず、完掘していないため土器廃棄場全体では個体数はさらに増加する。他遺跡と比較できうる資料は今のところ無いが通常の竪穴住居跡出土量と比べても圧倒的に個体数が多いことが予想される。S X01が廃棄場所であった可能性を裏付けるかもしれない。

さて器種別でこれらを見ると杯が279点・68%を占める。次いで土師器甕(大小型を含む) 73点・18%である。高台杯が57点・14%であり、これで100%となる。そのほか須恵器壺・甕が2点・0.4%があるが、百分率では百を超えており、割合的には0%に限りなく近い。したがって、組成比としては土師器のみで杯：甕：高台杯＝7：2：1となる。この割合が他の遺跡と比べてどうなのかは今のところ不明である。同様の計測法（図示以外の遺物も含めて）による比較が重要であるためであり、今後資料の集積を待って比較したい。

杯の細分で見ると全279点のうち、内外面ともに黒色処理をしないもの(以下、非内黒)239点・85.6%、内面のみに黒色処理を施すもの(以下、内黒)が34点・12%、両黒が5点・2%、須恵器が1点・0.4%となる。構成比は、非内黒：内黒＝9：1となり、大多数を非内黒で占める。少数ではあるが一定量の内黒が残り、両黒と須恵器はほとんど割合がないことになる。高台杯でも同様の割合で、非内黒：



第55図 甕の分類



第56図 組成比のグラフ

内黒の割合が9：1となっている。この時期の傾向として一般化できるかわからないが、本遺構の傾向としては上記のようになる。

いっぽうで芦萱遺跡の場合は包含層出土遺物が一括性をもつという保証はないが仮にまとめておく。個体数を見ると総計301個体の土器が出土している。器種別にみると杯250点、高台杯36点、甕15点、須恵器甕1点である。供膳具：煮炊具：貯蔵具の割合は、10：1：0.5となり、杯類が圧倒的な量を占めることがわかる。供膳具のなかをくわしくみると、杯では非内黒が237点、内黒が11点、内外面黒色処理が2点が確認され、杯の中でも非内黒土器が圧倒的多数を占めている。このような状況は新平遺跡SX01と類似している点である。したがって個々の遺構の特徴というよりは時期的な傾向を示しているかもしれない。

杯の特徴

器形をみると掲載したなかでは口縁部が内彎する杯A類が18点ともっとも多く、BとC類は同数となっている。杯A類をさらに詳しくみると、2や3類の底部が窪む器形のもが主体（7割程度）を示す傾向にある。かつて奥州市水沢区中半入遺跡での検討例（西澤2004）でみるとこの器形は時期的に新しい傾向である。計測値をみると、口径が15cmを超えるIV類については非常に少なく3例が確認できるのみである。主体はIとIIの大きさとなるのが新平遺跡SX01出土土器の大きな特徴である。また、出土例が少ないものの、杯A類やC類に多くみられるように同一器形においても大小の大きさが認められることからある程度の量量分化が存在していたと考えられる。

芦萱遺跡の器形では、杯A類12点、B類19点、C類7点となり、A・B類が主体を占めていることがわかる。このうち、AとBには2類の底部が突き出るような形態のもが一定量（3割から4割）出土するが、新平遺跡よりは割合が少ない。口縁部の計測値をみるとIの大きさが8点、IIが23点、IIIが5点、IVが2点となり、IIの大きさが主体的である。Iの大きさも一定の割合を占めること、IVがほとんど出土しないことなどが芦萱遺跡出土杯の特徴となる。

甕の特徴について

甕類については、杯に比べて圧倒的に数が少ないものの一定量が確認できる。先の分類別に見ると²A類11点、B類7点、C類22点、D類6点、E類1点、F類1点となり、C類が46%と約半数を占めるのが大きな特徴である。次いでA類が23%、B、D各15%が続く。また、E・F類など他遺跡でも類例が少ない土器についてもわずかながら出土する点が重要であろう。主体となる器形のC類につい

ては口縁端部の角度についてみるといくつかの形態に細分される可能性があり、あるいはこれが時期差を示しているかも知れない。

E類は羽釜と呼ばれるものである。この形態はこれまでの時期にはあまり例が無いものであり、この土器群を特徴づけるひとつの器種であるといえる。F類は他の器種に含まれる可能性が残るが一応ここでは甕類に含めた。これらE・F類については口縁部のみの破片であるため全体の形態は不明であり、類例の増加を待ちたい。また芦萱遺跡については破片数が少ないこともあり1/12口縁部計測法による細分計測は行っていない。分類別の破片数でみるとA 5点、B 6点、C 48点、D 7点、E 1点、F 0点となり、C類が主体となる点は新平遺跡と同様である。

そのほか、大きな特徴に底部痕跡がある。S X 01出土の土師器甕底部には砂が付着する「砂底」土器や「ムシロ」痕跡が残るものがまとまって確認された。底部での通常との比率を見ると全個体73点のうち、ナデ調整が残るもの25点・34%、糸切り調整が残るもの37点・51%、いわゆる砂底が7点・10%、ムシロ痕跡が残るもの4点・5%となる。砂底、ムシロ痕が一定量確認できるのは他の遺跡にない特徴となる。

いわゆる砂底土器については、櫻田によると土師器甕に確認される例が多く、東北地方北部においては普遍的な土器の特徴とされ、東北北部から北海道にかけて分布が集中しているという（櫻田1993）。岩手県内では安比川沿いに分布が集中することが知られている。また、八幡平市安代町上の山Ⅶ遺跡ではこのいわゆる砂底土器と後述する簾状の圧痕をもつ土器が出土しているのが注目される。

ムシロ痕跡については集成をおこなった稲野（稲野1995）や丸山（丸山直2006）をみると、岩手県域では、盛岡市域に1点のみ確認できるが、花巻・旧石鳥谷から北上市域にかけての北上川流域に集中する傾向がある。東北南部に出土が確認される点でいわゆる砂底土器の分布域よりも広いことがわかる。9世紀前半代までは宮城や山形県に、9世紀後半から10世紀前半は岩手や秋田県に、10世紀から11世紀にかけては津軽地方に分布域が移動する傾向があることが指摘されている（稲野1995）。器種についても甕だけではなく杯においても確認される。杯底部（外底面）にムシロ痕跡が確認されたのは3点のみであるが、図示した第28図20のような杯もこの種の土器と思われる。このような土器についてはこれまでの出土例をみると、ある特定の地域に偏りがある。また高木中館遺跡例では出土する遺構にも偏りがみられる。この種の土器については様々な捉え方があるが³未だ明確ではない。いずれにせよ、この種の土器群が一定量確認できるものの、主体的ではない点は指摘しておく。

なお、図示しなかったが芦萱遺跡においても甕15点のうち「砂底」が2点確認されている。

（4）比 較

次に、ある程度の年代を想定するためにこれらの特徴を持つ土器群と周辺の遺跡の土器群とを比較してみる。内面に黒色処理が施されない無処理の杯類（非内黒杯）が主体となる時期はこれまで10世紀以降と考えられている（伊藤1998、井上1996、八木1993など）。S X 01出土の杯では総個体数279例のうちこの種の土器は86%、芦萱遺跡では95%をしめることから両遺跡出土土器は総じて10世紀以降の時期と考えられる。ここでは両遺跡の出土土器のうち杯類を中心としてこの時期に位置づけられる胆沢城の資料と比較しつつさらに時期を限定していきたい⁴。

胆沢城には年代推定のための重要な遺構がいくつかある。そのなかで4時期の遺構が重複している箇所（S K 158・155・152・S X 126）と十和田 a テフラを介在とした良好な層位関係のあるS E 1050を取り上げて本遺跡資料と比較してみたい。

重複関係のうち古いものから順にみていこう⁵。

胆沢城 S K 158 (10世紀前葉) 非内黒土師器では杯にはA類とB類が認められ、A類には1類と2類がB類には1・2・3類がそれぞれ認められる。大きさはA 1とB 1類にⅡの大きさが少数確認されるが、主体はⅢの大きさとなる。法量分化を認めるとするならば、ⅡとⅢとに分化していたかもしれない。

胆沢城 S K 155 (10世紀中葉) 杯類ではA、B類のほかにC類が確認されるようになる。A、B類でも2類の細別形態が確認できるようになる。大きさはほとんどがⅡの大きさとなり、IがB 2類にわずかに確認できるようになる。Ⅲが確認できず、総じて小型化している。杯以外では高台杯がある。

胆沢城 S K 152 土師器杯ではA 2 Ⅱ類、B 2 Ⅱ類が主体となる点とA 2類にIの大きさが確認される点はS K 155と同様である。いっぽうでA 3類にはⅢの大形品も残る。この出土土器がある一時期の組成のすべてと仮定すると、あまり明確な法量分化は認めにくいと思われる。杯以外では高台杯がある。

胆沢城 S X 126 A Ⅱ類が主体であるが、IやⅢの小・大型の大きさも確認される。杯以外には高台杯(Ⅲ)、柱状高台杯(Ⅲ)がある。杯の組成的にはS K 152に類似するが、柱状高台杯(Ⅲ)が加わるのが特徴かも知れない。

以上の4遺構の重複関係からみると、器形は杯Aがいずれの遺構にも存在すること、A 2、B 2類の器形は後出的であることがわかる。大きさでみると、S K 158の段階ではⅢの大型が確認されているが、次第にⅡの割合が増え、Iの小型が組成に加わるといったことがわかるかもしれない。S K 155・S K 152・S X 126は杯でみるとその内容にはあまり明確な違いは認められず、大別するとS K 158→S K 155という流れが想定されるところ。

胆沢城 S E 1050 各層出土土器を古い順にみると、5層は杯A・B・DのⅢの大きさのみである。4層はD・EⅢに、B・C・DⅡが加わる。3層は杯の各類にⅡ・Ⅲ・Ⅳの大きさがそろそろ。器形もGなど多くの器形がそろそろ。2層は大きさがⅡとⅢで大部分を占め、器形もD・Eが多くなる。Ⅳの大きさも一定量は残る。1層はEⅢ・CⅢ・AⅢとAⅡ・BⅡ・CⅡ・EⅡ・GⅡがある。Ⅱの大きさが多くを占める。ⅡとⅢで組成が構成される。なお、甕については共伴する例が少ないため様相は不明としておく。

このようにみると大きく2つの時期に区別できるかも知れない。

最初の段階(1期とする)では、杯AとB類があり、C類は確認できないことが多く、比較した遺跡が少ないこともあり定かではないが、C類はA、B類より後出的かも知れない。A、B類の細別分類でも2類や3類は少ない。法量ではⅡ、Ⅲの大きさが確認できる。この段階では法量分化が認められるがそれは口径の大きな器種間、すなわちⅡ-Ⅲで構成される傾向がある。量的に多いのはⅢの大きさとなる。次の段階(2期とする)ではⅢの大きさが減少し、Ⅱが大部分を占めるようになる。このなかでIの大きさのものが登場しはじめるが、これとⅡの大きさが法量分化を構成しはじめる。Iの大きさが2期のなかで漸次増加傾向にあるかも知れない。器形はA、B類には2類の形態が増える傾向にある。いずれにせよ総じて口径が前段階よりも小型化し、Ⅱのみで占められる。そしてIの大きさが少数ではあるが出現することに大きな特徴がある。ただし、依然としてⅢの大きさもわずかながら存在している点は重要である。

先にふれた新平遺跡出土土器の特徴と比べてみると、杯A・Bに2類が多い点、大きさにはIとⅡで構成される点などから2期に相当すると考えられる。なお、新平遺跡に少数ながら出土の見られたⅣの大きさのものは多賀城出土資料などをみると9世紀代に多い大きさと思われる。上にあげた胆沢城跡資料には出土が確認できないものの、本遺跡例を考慮するとこの大きさのものが少数ながらこの

段階まで残っていることは付け加えておきたい。

つぎに井上編年との対応をみると、井上は小型杯（口径10cm前後）の出現を10世紀中葉の、小皿（口径9cm前後、器高2.5cm以下）の出現を10世紀後葉の指標としている（井上1997）。先に想定した段階に対応させると、1期は小型杯が確認できないので10世紀前葉、2期は小型杯が確認できる段階として10世紀中葉の年代がそれぞれ想定できよう。一部に小型皿（ここでは杯Ⅰの範疇に含めている）の存在が確認できるため後葉にも一部かかると推定される。新平遺跡S X 01では十和田 a テフラの上層にこれらの土器群が出土することからこの年代観には矛盾が少ないと思われる。

伊藤編年との対応でみると、まず高台杯の共伴例からⅡ期後半以降に限定できる。この段階は杯に分化していた法量がⅡ（中型）に統一されるものの、器種の分化もっともすすむ段階とされる（伊藤1998）。この特徴は先に設定した2段階に相当するかもしれない。杯の大きさはⅡに統一されるようになり、さらには杯AからCまでそろうなど新平遺跡出土土器と類似する特徴かも知れない。

芦萱遺跡では新平遺跡土器廃棄場（S X 01）出土土器と総じて類似する傾向にあるが、Ⅰの大ききの割合が少ない点が大きな違いとなる。ただし、これまでの研究ではこのような傾向がどのように位置づけられるかは不明であるため、芦萱遺跡出土土器については小型杯が一定量確認できる点のみを重視して井上編年に準拠させると10世紀中葉の年代を想定しておきたい。

なお、これまでのところ周辺の地域において10世紀後葉以降の年代が想定される出土土器についてはあまり知られていない。対象を広げて宮城県多賀城周辺地域出土土器についてみると、これらの出土土器を検討している井上によれば、10世紀後葉の土器の特徴は口径が9cm前後、器高の低い小型皿とⅢの大ききの非内黒杯類のみで組成が構成されている。杯（皿）類の主体はⅠやそれ以下の大ききとなり、Ⅲの大ききは少数ながら依然として残っていることになる⁶。

このようにみると、新平遺跡や芦萱遺跡出土土器については杯ではⅠの大ききの割合が少ない点でこれらの土器群とは大きく異なることから、10世紀後葉には降ることはない⁷と推定される。

このように新平遺跡出土土器の特徴を他遺跡や先行研究と対比させるとおおよそ10世紀中葉を中心とする年代が想定できるかも知れない。ただし現時点では絶対年代を決定する根拠は明確には乏しく、型式編年に想定される年代幅を振り分けている点に主体がある。今後はより明確に絶対年代が付与されている施釉陶器や貿易陶磁などとの共伴例から検証する必要があるだろう。

（5）おわりに

以上、新平遺跡、芦萱遺跡出土土器について、若干の検討と年代的な目安を想定した。両遺跡とも時期的にはほぼ同時期に位置づけられたが、この時期の土器については、周辺では出土例が少なくさらに検討する余地が十分にある。今回の出土を例のひとつとして提供できればと思う。（西澤）

註

- 1 本来は杯と皿を区別しなければならないが、基準については研究者によってことなり、今のところ明確な基準はない。ここの目的は出土土器の特徴とおおまかな年代を付与することにあるため、あえてこれらを一括して検討することにしていく。いずれ区別して検討しなければならない。
- 2 口縁部分類のため、この場合は1/12口縁部計測法によって個体数を算出している。
- 3 菅原祥夫はこれらを蝦夷系土器とし、東北地方北部からの移住を考えている（菅原2000）。
- 4 以前にも同様の遺構を利用して比較を行ったことがあるが（西澤2004）、分類を若干変更したため再度比較を試みるものである。
- 5 あくまでも掲載遺物を中心に比較を行おうとしているため、根本的な誤りをおかしているかも知れない。
- 6 こういった特徴をしめす土器群は先に想定した2段階に後続する特徴となろう。これを3段階と想定しておく。